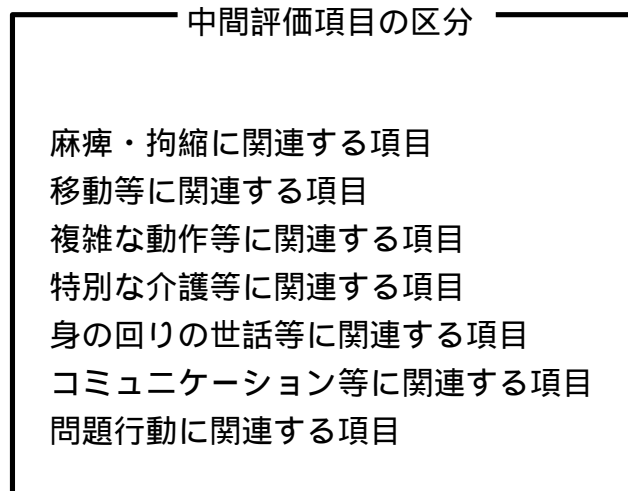


中間評価項目に関する説明について

1．中間評価項目の区分の考え方

(中間評価項目と調査項目)

73 項目からなる心身の状況に関する調査項目は 7 項目の中間評価項目のいずれかに属します。



(中間評価項目によるグループ化)

中間評価項目として調査項目をグループ化する際には、10 年度の試行的事業の対象となった約 16 万人に関する調査結果を利用して、連動して調査結果に所見(「できない」「全介助」等正常以外の調査結果)が見られる傾向がある調査項目を一群としています。

(例：第 5 群 [身の回りの世話等に関連する項目] の「ボタンのかけはずし」に所見がある場合は同じ群に含まれる「上衣の着脱」にも所見がある傾向がある。)

(中間評価項目と状態像の理解)

同じ群の中間評価項目に含まれる調査項目は同時に何らかの所見を持つ場合が多いため、中間評価項目ごとに調査結果を整理した上でその所見を見ても、その方の状態像を理解することが容易になるという利点を持っています。

2．中間評価項目ごとの個人別得点について

(選択肢と機能の高さ)

個々の調査項目(73 項目)の選択肢は、例えば、動作についての「自立」「一部介助」「全介助」や、問題行動についての「ない」「ときどきある」

「ある」というように、機能の高さや状態の良さなどの順番に並んでいます。

(選択肢への配点と個人別得点)

そこで、最も機能の高い(状態が良い)選択肢に対して高く配点され、最も機能が低い(状態が悪い)選択肢に低く配点されれば、個人ごとの調査結果に基づいて採点していくことによって、個人の得点を計算することができます。

(具体的な配点方法)

個別の選択肢へ具体的に配点が行われるためには、その選択肢と機能の高さとの関係を明らかにする必要があります。そのため、グループ化を行う際に用いた約 16 万人のデータを用いて、機能が低下(状態が悪化)していく傾向を統計的に見てみました。その結果、機能の高さ(状態の良さ)との関係が深い程、高い点数が与えられることになっています。

(中間評価項目ごとの得点)

今回の方法では、それぞれの中間評価項目について、調査項目ごとの得点を合計していくと、最も機能が高い人が 100 点、最も機能の低い人が 0 点となるようになっています。

(配点を持つ意味)

従って、群を越えて選択肢への配点の高さを比較することはできませんが、同じ群の中では、その配点を比較することによって、どちらの調査項目が機能の高さ(状態の良さ)と関係が深いのかを知ることができます。

(中間評価項目ごとの得点と要介護度)

中間評価項目ごとの得点が低いということは、一般的には、その方の機能が低い(状態が悪い)ということになりますので、要介護度が高くなることとなります。このような傾向は、障害老人の日常生活自立度(寝たきり度)の判定結果(JABC)や痴呆性老人の日常生活自立度の判定結果(M)と同じ様な特性を持っているといつてよいでしょう。

(要介護度判定上の留意点)

このように、中間評価項目ごとの得点は要介護度の判定の際に参考になる一方で、要介護度は介護の必要性を示すものですから、個別の判定においては、要介護度が機能の低さ(状態の悪さ)と必ずしも一致しない場合があるということには十分注意する必要があります。